

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第199号（2022年12月）

常世の風に吹かれて呟いて（7） 白井啓治

（白井啓治氏の10年前のブログ記事から一部を

抜粋して連載します。）

『寒い一日 お猫もお犬も』

炬燵の内外で丸くなり

（2012年12月12日）

我がお犬様、すっかりと座敷犬になつてしまい、先輩のお猫様に倣つて炬燵から離れようとしないう炬燵布団に伝わってくる暖かさがすっかり気に入つたようである。一日動こうとしない。呼んでも傍にもやつて来ない。

何かを煩く要求されることを考えると、有難いことではあるが午後のトイレタイムで庭に出ようと言つても、今日は水を飲んでいないから夕方の散歩まで外に出ない、という。何たることか。

今日は何年ぶりで企画書を書いている。昔のようにパツパと書けない。というか企画書を書くコツを忘れてしまつていようだ。まあ明日一日の猶予があるから何とかなるだろう。

夕方、某新聞社から今回の選挙についてのコメントを求められた。だが、多くの人がそうだと思うが今回は判断の基準がとれない。

小生は、支持する政党は持つていないが、どの政党も具体策の持つていない絵に描いた餅、…よりも悪いかな？ で判断の基準となるものがない。

テレビなどを見ている、具体策をきちんと答えられている政党はない。白票を投ずるしかないような気がするが、それでは自分の一票の責任を負うことはできない。困つたなとばかりは言つてられない。ハッソとため息が出る。



（絵： 兼平智恵子）

『月はもう西に傾き』

見上げる天は星達のラッシュ

（2012年12月19日）

明日の朝は相当に冷え込むのだそう。今外に出てみたら、月はもう西の方に大きく傾き、真上の天は星達の瞬きが薙めきあつてい。冬の晴れわたつた夜空のシャープさは寒さを我慢すればこれほど美しいものはない。瞬くプラチナの鋭い剣先は肉体の奥底まで突き通つてくる。

外に出ようとしたらお猫様が飛んできたが、玄関から入り込む冷気を感じて急ターンして部屋に駆け込んでしまった。

今日は、ことば座の来年の企画打ち合わせで、小林を連れて土浦で久美ちゃんと会う。今年のこ

とば座を振り返ると、新しい展開が生まれ良い一年であつたが、来年は今年以上に愉快な年になりそうである。

昨夜、布団に入り自分の来し方を振り返つたら、何と来年は表現生活50年になる。最初に演劇に足を突っ込み、映像の世界に移りそして再び舞台に戻ることになつたのであるが、もう半世紀になるのかと思つたら、感慨と言うよりはビックリだあッ。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額1,500円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

《お知らせ》

本会報「ふるさと風」も次回で200号となります。16年と8ヶ月間毎月発行してまいりましたが、201号からは年4回（春夏秋冬：4月、7月、10月、1月）の発行となります。今後とも応援の程宜しくお願い致します。

悪路狼夢（オロロム）の歌 III 兼平智恵子

先月号より続きをご案内します。

手話舞劇 悪路狼夢の歌

語り部 白井啓治 手話舞 小林幸枝

「鹿島が浦の波が静まった時、悪路狼夢は大和の侵略者達と混血し、誇り高き蝦夷の心を忘れていく行方地の地を捨て、奥州の蝦夷に合流し大和と戦うことにした。

数頭の行方馬を買って、黒坂命、建借間命の軍勢を一人で蹴散らした奈女比古の血を受け継いだ悪路狼夢の戦力は、大和の兵士達から恐れられた。

悪路狼夢は何時しか奥州の蝦夷の頭目となった。悪路狼夢の率いる蝦夷の軍は大和の兵を押し返し、岩手県南部の田谷窟に塞を築き、その勇姿を誇った。

舞歌③（剣の舞）

『大和の侵略の輩ども 我が怒りの剣をうけよ
我が怒りの剣を胸に受けし者どもよ
後悔のどす黒き心の血を流せ
我が剣の刃は 汚れたお前たちの
どす黒き血に染まろうと光の失せることはない
愛する者の命を奪われし者の悲しみは
幾千万の命をもつてしても
償うことはかなわない
大和の侵略者よ 我が怒りの剣をうけよ』

語り部 「悪路狼夢の命恐れぬ戦力は大和に脅威

と なって恐れられ、いつしか悪路王とよばれるようになったのであった。

恐れる者なしの悪路狼夢であったが、坂

上田村麻呂を征夷大將軍とした討伐軍との戦いで、大勢の犠牲者が出ることをよしとしなかった。悪路狼夢は、蝦夷の民を救うため坂上田村麻呂に自ら降伏を申し入れたのだった。大陸から渡米した武將と噂された田村麻呂は、敵ながら天晴れな大陸的武將ぶりと、その潔い男気にほれ込み都に連れて行き朝廷に助命を嘆願したのであった。

しかし、これまでにうけた蝦夷の戦力を恐れる朝廷からは許しがえられず、河内で斬殺されたのであった。

田村麻呂は、己の力の無さを悪路狼夢に詫び、平伏するのであった。この時悪路狼夢は、田村麻呂に一つの願いを託したのであった。

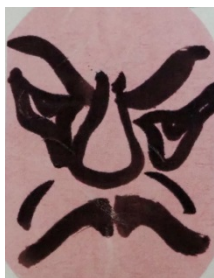
「覚悟はすでに出来上がっていた。この期に及んで貴殿を恨みに思う気持ちなど、露にもない。この世に未練もない。だが一つだけ貴殿に我が願いをむしりたい。私が死んだら、わが民の守護の神である「シカシマのカムイ」の杜に、貴殿の御手にて、我が御魂を帰してはくれぬか」

シカシマ・カムイの杜に御霊を帰してくれという悪路狼夢の願いは、一途に愛した蝦夷の舞い娘「乙音」の眠る鹿島の森に帰り、永久に眠ることであった。

田村麻呂は、悪路王こと悪路狼夢の首を密かに桂村は高久の鹿島神社に安置し、時を図って鹿島神社に祀ることを考えた。

何故、高久の鹿島神社に仮に祭ったのかは、知る術もないが、悪路王、悪路狼夢の首が、田村麻呂の手で鹿島神社に祀られることはなかった。

時代は下がり、江戸時代は前期の寛文四年のことであった。奥州の藤原満清という人物が、鹿島神社に「悪路王の首像」と称し奉納された。藤原満清とはどのような人物なのかは全くわかっていない。悪路狼夢が亡くなっておよそ八〇〇年後、既に悪路狼夢の顔も想像にしか判らない中で、満清は、己の顔を模して彫らせた首像を鹿島神社に悪路王として奉納したのであった。



藤原一族は、古代東北地方を平定した中心勢力であったが、蝦夷の反抗には再三手を焼いていた。そんな時、藤原の娘「道子」が、頭角を現す前の悪路狼夢に助けられたことがあった。それが縁で、まだ乙音への傷心の回復せぬ悪路狼夢を道子が慰めたのであった。道子に心を癒された悪路狼夢は、蝦夷の首領となったときに、都から来た坂上田村麻呂の類まれなる戦力を知り、これ以上の双方の犠牲を出す意味のないと、降伏したのであった。

田村麻呂は、悪路狼夢の武将として、一族を納める首長としての技量と男気にほれ込み、都につれて、助命嘆願をしたのであったが、許されず斬殺となつてしまった。

悪路狼夢の降伏の直接の原因となつたのは道子に我が子が宿つたことにあつた。心を失つた権力の独り歩きによる殺生が、如何に勇気のないことかを、悪路狼夢の夢の枕に現れた乙音の舞に諭されたのであつた。

舞歌④（乙音の舞、鬼畜武士の哀れ）

『悪路狼夢』

あなた様の剣に幾千人の大和の武士が
血を流し命絶とうとも 乙音の悲しみの
癒えることはございません
乙音は

あなた様が血に飢えた鬼畜になることは
望みませぬ もう お許しなされ
恨みをあなた様の言い訳にされては
黄泉の国の私にも安静は訪れません
悪路狼夢

目をお覚まし下さい
あなた様のお側におられる
美しき乙女の現世に生きる哀しみの心を
お汲みなさいませ
悪路狼夢

剣の刃に心の力を移す武士は鬼畜ぞ
悪路狼夢

恋に生きてくださいませ

恋の生まれぬ里は滅びます

語り部

恋のつくれぬ人は人には非ず
悪路狼夢
あなたは人の子
恋をつくる人の子
シカシマのカムイの子』

「悪路狼夢が打ち首になつた後、道子は子を産み、女手一つに育てた。満清はその子孫であつた。満清は、悪路狼夢の首像を鹿島神宮に奉納すると、その足で蝦夷地に渡つたと影にいわれている。

舞歌⑤（紡ぎの舞：道子の悪路狼夢賛歌）

『私はカムイの子悪路狼夢に救われた大和の女の子』

悪路狼夢

あなたはもつと自由に自在に
あなたを生きてください

どんなに恨みや怒りをお持ちでも

あなたは あなたのための自由と自在を
お捨てになつてはなりません

悪路狼夢

あなたのお心が黄泉におわす

乙音どのにあつても 私のあなたを

お慕い申す気持ちは変わりません

悪路狼夢

あなたの自由と自在を

あなたのためにお使いください

あなた様の今日の暮らし

明日の暮らしは私が紡いでまいります

悪路狼夢

悪路狼夢

あなたがシカシマのカムイのおわす
森に帰る日まで
私はあなたの心を紡いでまいります

|| 終 ||



桂村高久の鹿島神社



悪路狼夢の舞を奉納する

小林幸枝と矢野恵子



白井啓治先生（右端）

白井代表による悪路狼夢の歌如何でしたか。
悪路王とも呼ばれ恐れられた悪路狼夢、愛する人のために、蝦夷の民を救う為に、そして、双方の犠牲をだすまいと降伏を申し入れた悪路狼夢の度

量気魄のある武將ぶりと潔い男気を、今の世にも戦を強いてる国に届けたい。

○今年もあつという間の一年と笑む山茶花

智恵子



(ちえこ)

我が人生の回想11

木下明男

1970年代人生の円熟期へ・・・

20代から30代前半で多くの影響を受けたのは、職場では5つ上の先輩Mさん・・・。労音のサークルに誘ってくれたSさんや同期生や仕事上の仲間たちです。労音の活動をするようになってからは、事務局の地区担当だった「小松ちゃん」と呼んでいた姉さん活動家。生き方を根本から考えさせられたのは、函館労音の事務局長で、綽名が「旦那」と呼ばれていた佐藤さんと民族芸能学者のタカクラテル先生・・・。そして地域内の職場で働く多くの仲間たちです。漠然と生きていた私が・・・社会での存在について考えるようになった。家族・職場・地域・・・そして、職場のある地域や家族のいる地域、地域が集まる都市、都市

が集まる日本等の国、国が集まる世界・・・さらに地球や宇宙を考えるように??? 結婚、子供の誕生、職場の移転、引っ越し・・・

世の中の変遷。諸々の変化の中で、どのような役割を果たしているか?何をなすべきか等、悩み多き時に大きな影響を与えてくれたのが、その時期の東京労音の委員長で、東京経済大学の教授である「先生」。この先生により引き上げられ、東京労音の中心活動家として働くようになった。私が働いていた職場(ニコン)では、職能給(弥富賃金)導入により成績査定評価を恐れ上司に逆らえず、物を言わない暗い職場環境になっていった。年寄はもとより、若い者も従来の組合から離れ会社を作った新労組(第二組合)へと靡いていくのだった。僅か数年で大半の者が、会社の作った組合に移っていった。(7000人の社員の中で元の組合に残ったものは100人を大きく割る)そのような状況の中で私は、会社にものを言える存在として、職場の中では多くの信頼を得ていく。微力ではあっても、私たちがいなくなれば職場の中は暗くなる・・・組合に関係なく、みんなと協力して思いを上司に要求し、既得権を守っていく・・・そんな日々が続いた。

勤務地が品川区から、横浜工場(大船)に移り新しい職場(私以外全員が二組)に変わったが、やはり組合に関係なく、みんなと働きやすい環境作りに頑張る。義姉の処(横須賀)にいれば、勤務地が近くなったのに、この時期蒲田に家を買って引っ越しを・・・通勤時間は遠くなったが、労音の活動にとっては大変便利になった。本部(新宿区)での会議が、週1、2回・・・それに伴う地域(主に蒲田)での会議が同じくらい。会議で

決まった内容の実践があり、ほぼ毎日が労音の活動に追われていた。会社に於ける組合活動(青年部簿役員)も、残業を断り終業御直ぐに組合の事務所へ、その後労音の事務所へ出かけるのだった。住まいが遠かったときは、活動が遅くなると終電が無くなり(PM11時頃)仲間のアパートを泊まり続ける毎日。年に100日を超える外泊の日々・・・蒲田に居を構えることで、外泊の日々はなくなるが、その分仲間が泊まりに来ることがあった。

この頃日々の活動激務が祟り(飲酒、タバコ、夜更かし)大きく体を壊したのも此の頃。(十二指腸潰瘍他で入院)労音で活動していた仲間の多くは、地方からの出稼ぎ者。特に若い女性(寮住い)は、諸々の悩みを抱えていて相談に乗っていた。一番多くは恋愛、その他田舎での家庭問題、人生の生き方・・・。統一教会のお姉さんたちに惹かれて、寮を空ける娘たちを多く救ったのも此の頃だった。その後、その娘たちが結婚し(仲人をしたり主賓として呼ばれたり)普通の家庭を形成しているのを見て・・・。

労音活動の主要な課題として、海外の優れた音楽を日本に紹介をする。既成の音楽事務所から企画を買うのではなく、会員からの声を聴いて運営委員会で纏め、企画を立案する。働く者たちを励ます、音楽文化を研究し海外の対外文化組織に連絡を取り、代表団を派遣。直接海外に出向き、そのアンサンブルや団体、多くの演奏家と交流鑑賞し日本公演の要望を伝える。(ソ連、ベトナム、モンゴル、イタリア、東ドイツ、スペイン、ペルー、アメリカ、イギリス等々多数の国に及んだ)代表団の団長として、年に5、6回も海外に出かけた

こともあった。色々な面で、我が人生で最も充実した時期・・・。



(さちえ)

地域に眠る埋もれた歴史 (87)

木村 進

【民族芸能と祭り】(1)

日本全国には変わった祭りや風習が残されています。この石岡地方周辺でも、各所で伝えられ守られてきたこれらの祭りや風習があり、全て伝統芸能というように考えてよいと思います。

しかし、意外に知られていない物が多くあり、その中には民俗学的にも大変興味深いものが散見されます。ここではそれらの祭りや風習などを集めて見ました。

悪態まつり (岩間飯綱神社)

旧暦の11月14日(現暦で12月半ば)に岩間の愛宕神社(笠間市)の裏手にある13天狗の祠を祀る飯綱神社に昔から伝わる奇祭「悪態まつり」があります。

天狗の話(平田篤胤の仙境異聞)に登場したこの神社ですが、ここに伝わる変わったお祭りです。コロナ禍の前に訪れて見学した時の記録をお話します。

祭り当日の午後2時頃になると神社の社務所の前で準備が始まりました。

まず、役員の方達が、霞ヶ浦で朝獲った生きた魚(フナ?)を使って、手にぶら下げられるように口に葉っぱなどを紐状にしてくります。

また、入口を斜めにカットし、ぶら下げられるようにひもをつけた青竹の筒の中に、甘酒を注ぎこみます。この青竹などはオバンドーと呼ばれていました。



(オバンドーと呼ばれる青竹の筒に甘酒を注ぎます。)

備した魚と竹筒を天狗の祠に一つずつ釣りさげます。



(飯綱神社裏手の天狗の祠に魚と甘酒の筒を吊り下げます。)

準備した魚と竹筒を天狗の祠に一つずつ釣りさげます。



2時半になると飯綱神社に白装束に烏帽子に足袋の姿をした天狗(氏子さんたち)が13人集合し、

ないまま「傍聴しよう」という気持がわき、十八年の時のながれを議会傍聴へと、出発する日になりました。

曇り時の多勢いの波は、意気揚々と流れていきました。その中の一人が私の運動靴の泥を見て、「泥くらい払ってくるもんだよ。」と見下した言い方で勝ち誇った者の捨て台詞でした。こういう出来事の中で傍聴への道を開きました。

その頃は元気でした。六十代に入ったばかりの私は若かった。自転車で美野里の庁舎の入口に立ちました。玉里から来る道は何本もありますが、一番短い一時間でこられるコースを見つけ、自然の中を楽しく前向きに走りました。始めの頃は仲間も何人もいて昼食を一緒にしたり、話しをして明るい表情での傍聴でした。その中一人になり、お握りを持つての神社の境内、寺の跡地、巴川の堤で済ませたものでした。だんだん、バス利用をし、車に乗せてもらうことが増えていきました。

都合をつけて一議会中五日（初めの日、半日終わりの半日、一般質問三日間）出席するのが当たり前になりました。専門語が多く内容がわかりにくかったり、眠くなったり、でも苦痛とも感じず出かけていきました。

始めは傍聴してただけでしたが、自分だけでは勿体ない、と思い、個人的な感情は入れずに、頂いた資料を一冊にまとめ、いろいろな人に届けようと決めました。この際の強力は、遠くの方は妹や娘たちに頼み、近くは自分で、また夫の元気な頃は協力して貰いました。夫は、本意ではない、運転だけと言っていたことが耳に残っています。

私の思いを推しつけるわけではないけれど、報告については長い間にはいろいろの声がありました。

「兄弟のために点数稼ぎか」

「あんたが報告なんか配って歩いているから、いつも当選するんだわ。俺は負けたよ。落選した。」

「選挙がらみで歩いてんだらう。自慢気に配って歩くなよ。」

「広報で見つから沢山だよ。」

恐ろしい表情で言われたこともありました。

コロナ流行の二年め、

「コロナが流行してる時に、そんな物配つてあるいて・・・」と表情をかえて、一寸した紳士も台無しの人。

親しくしていた年上のお姉さんから「何やって歩いてんの。こんな時に・・・」

じゃあ郵便屋さんはどうするのと言いたいが我慢、今迄のお付き合いはどうなってるのかと思うだけで帰って来ました。

こんな葉書もありました。

前略 無学な田舎の婆さんに目くら立てる

気はありませんが・・・・・・

確かに私は姿・容も田舎者、学もない、この方とはお会いしたこともない。奥さんとは一応礼を尽してきたつもり、家庭内のコミュニケーションがとれてないんじゃないですかと、返信用の葉書を出したかったが、やめました。辛かったです。悲しくも思いました。でも私の思いは、つまらぬ批判に負けるものかと踏ん張り、私の願いをくみとって頂くことはなかなか難しいと改めて思いました。

議会中の時間は、いつもきちんとしていました。始まりは勿論、休憩は一時間に一度（十分〜十五分）、終わりは内容によって多少のずれはありました。執行部の人達の姿勢の良いのには驚き、それ

に比べて議員の中にお喋りをよくしている人同士がいたりしましたが、最近では若い人が増えたからかそんな状況は見られなくなりました。

以前はひどいこともあり、議長に対する反発か、机の上に足をのせていた議員が注意をうけてもすぐにはやめなかったのです。やっとやめたが、後での陰での攻撃はひどかったと聞き、そういう一つ一つのいやがらせが、持病に拍車をかけ、亡くなるという悲劇もあったことは怖いとおもいました。副議長を巡っての嫌がらせもあった。研修先で、グループを組んでの攻撃、いい大人が、これで市長の前でどんな顔をし、どういう話しをしているのかと疑いました。勇気ある議員だったその人は議員の質を憂い、討えて呼びかけをしてました。

若い議員が増えてきた中でよい議会の運営が出来、質の向上や勉強も確りしてほしいと願っていても、古い議員の影の力に巻き込まれていくのは残念だと思うのです。良い仲間づくりをしてほしいと願うのですが、選ぶ自分たち一人一人が日常から人同士お互いを知り合うそこから出発でしょう。私は傍聴に通うようになって職員の人達に挨拶をしたり、議員さんと言葉を交わしたりしてきました。議場に入りする議員さんの姿、議員さん同士の挨拶、会話、交わり方もよく見えて長い間には人柄まで知れる思いです。執行部の人達の方がわかりにくい面が多いです。

お互いを知り合うことは、家庭でも、近所や地域、親戚、職場、活動、国と国すべて通じることですね。年寄りも年寄り自身をわかってもらうこと。若い人、時代をわかる努力をしましょう。

小川地区の議員さんを知ること、美野里地区の

議員さんを知ることで見えてくるもの、玉里地区の議員さんを知ることと決して端っこ議員でなく、小美玉全体を見詰めて頑張っていることが見えてきました。

令和三年十二月の議会をもって、長いお付き合いを頂いた人への挨拶をして閉めることにしました。令和四年に入って一年 この十一月も過ぎようとしているのに、未だにお届けが済んでいない所があるのです。年をとりました。体力も衰えました。機動も減り、気力も衰えました。令和四年もあと一ヶ月、その中にお届けが終るでしょうか。「遠いところ、毎回大変でしたね。」「地味なこと、よくやってんね。」「よく見せて貰ってる。」「貰ったものは一冊もなくさず綴じてあるよ。」「始めっから綴じてきたけど、いやいっぱいになったよ。」「本当にご苦労さまだったね。」

沢山の励ましの言葉があつて、続いてこられました。そして私は私の思いがあつて続けてきました。しかしよく続けてきました。本当にご苦労さま。

お届けした報告が、どう始末されるか、活用されるか、役立っていくかは、受け取ってください。たお一人お一人のお考えですから。

YU・MI・KO 本当にご苦労さまでした。



(よしこ)

烏帽子岩

小林幸枝

日立市河原子（かわらご）町の近辺を車で走っていて、海岸近くの陸地に、上に木が茂った岩がポツンとあるのが目に留まりました。そして「変わった岩があるな珍しい」と思つて調べて見ました。烏帽子岩（えぼしいわ）という名前の岩でした。形が昔の人がかぶった烏帽子（えぼし）の形の岩だったのでしょう。今では上に木が生茂り烏帽子の形かどうかは良くわかりません。この岩は海の中に突き出した岩ではなく、河原子海浜公園の海岸に近い場所にポツンと突き出した岩で、下の方は波の侵食で削られたようになっています。昔は海の中、または海岸の砂浜にあったようですが、今は、その岩の回り以外の周囲は原っぱや砂浜です。河原子海水浴場として周りは少し整備されたようです。

岩の中腹には津神社という神社があり鳥居が見えます。またその神社には藤田東湖の詩を刻んだ碑があります。江戸時代に水戸家の藤田東湖がここを訪ねた折に建立されたものだそうです。

現在その神社の回りは崩れそうで危険なため、金網で囲まれていて中に入る事はできません。しかし、フェンスの中に入れないようですが、神社の階段の所まで登ってお参りはすることができそうです。

東日本大震災の地震の影響で少し崩れたのでしょうか？ または崩れそうになったのか？ 今はフェンスを囲まれ中に入ってお参りすることはできません。でも、近くまで行くことはできますよ。

みなさん、是非、足を運んでみて下さいね。

風と共に

《理》(29)

大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「反撃」

新型コロナウイルスにインフルエンザと、マスクを外しても多様な脅威は消えないものです。本格的な冬を前に、健康で寒さを最低限凌げる、そんな当たり前の事が当たり前に享受できる幸せを、深く感謝する毎日です。

前回からの続きです。

我慢の限界を迎えた他「は自分が犠牲になって、例え辞める事となったとしても、と言う覚悟を持って話しています。」

男「今まで散々な目に遭わされ、あなただけでなく大勢の人が被害を被っていたと思いますが、申し訳ないんですが、到底あなた一人の行動でどうにか出来るとは思えないのですが、それについてはどう考えていますか？」

他「・・・」

男「もう少しだけ時間を下さい、今は様々な証拠や証言を集めている最中です。」

他「か「分かりました、少し冷静になって考えみます。」

男自身もこうなる事は予想していた為、あらかじめ動いていました。

そして、当日勤務者以外の全員を集めて、今後についての作戦会議を実行したのです。

男「今日みんなに集まってもらったのは、黒上司を今後どうすべきか話し合う為に集まってもらいました、みなさんはどう考えていますか？」

「辞めてもらいたい」

「だけど、本当に辞めさせられるか分からないし、目をつけられたくない」

「我慢の限界です、とことん戦いましょう」

「実際どうしたら良いのか分からない」等々

男「みなさんの意見はおおよそ把握しました、一緒に仕事をしていくはないけど、直接反乱して目をつけられるのも、そんな考えを抱いていたとも知られたくないと、そういう事で良いですか？？」

みなさん「・・・」

男「分かりました、私が直接本人に会社を辞めてもらえるよう、匿名の被害者から相談を受けた事にして、話します。」

みなさん「すいません、本当に一人で大丈夫ですか？、よろしく願います」

この時点で、第三者的にはこんな他人任せで卑怯なみなさんを、本当に救う価値があるのかと、思う方もいらつしやるかも知れませんが、その時の男には正義感が強く出ていた為、解決する事に重きを置いていた事もあり、後に起きる事を予想できなかったのです。

決戦当日、

男「すいません黒上司、お話があるんですがよろ

しいですか？」

黒「あらたまつてどうしたんだ、悩み事か？、なんか様子がおかしいな、どうした？？」

男「実は大事な話があるんですが、この会話を録音させてもらっても良いですか？」

黒「自分の得になる事は無いんだから、やめとけ」

男「・・・会社を辞めてください、黒上司に我慢の限界を超えていて今にも会社に訴えると、切実な声が上がっています」

黒「辞めないよ、文句があるなら裁判でも起こせば良い」

男「いや、そういう話ではないんですよ、黒上司は部下達にどんな被害を与えているのか、証拠も証言も揃っているんです」

黒「のせられたな、お前が庇って救う様な価値はあいつらにはないぞ？」

男「・・・だとしても、私の知るところとなり、そう言う訴えがある以上、何もしない訳にはいかないんです」

黒「この後用事が無いなら、一杯付き合え」

男「分かりました」

その後、黒上司は一人で立ち向かう勇氣と、今後は男がいなくてもみんなに最低限の礼儀を持って接すると、録音データをもらって終わりました。

ところが数日後のある日、

「誰かがさらにその上の上司へ報告してしまった様です」

男「分かった、その上司とコンタクトをとってみるよ」

そうして、後日黒上司のさらに上の上司へ、これまでの経緯と現状、今後についてを詳細に報告し、その半年後黒上司は他店へと異動処分が決定した。

洗脳が解けたみなさんと言うと、何事もなかったかの様に過ごし、そればかりか異動した黒上司と飲み会を開いたり、ことの顛末は男一人の行き過ぎた行動だったと非難する始末。

この時はじめて、黒上司からのせられてるんだと言われた、あの瞬間を思い出したのです。

良かれと思った行動が結果的に、男一人が被害を被ると言う、よくある世間の図式となりました。

しかし、この騒動にはさらに続きがあったのです。

当然、全社的に手に負えない黒上司と有名でしたから、その黒上司と直接「対一」で解決しようとする行動し、なおかつ異動する所まで漕ぎつけたと、その後に残ったメンバーが酷い裏切り行為を行なったと、広く噂が広まる事で男の汚名へ返上となったと同時に、評価も一段と高くなるのでした。

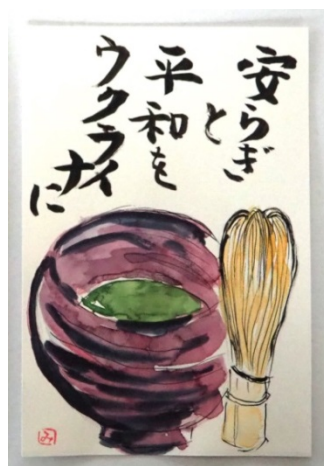
男自身も、その他大勢に掌を返されてしまいました。だが、これも人生の勉強の1つとポジティブな発想を持って、きつとまた次にこの様な事があつたら、もつとうまく立ち回れるだろうと、心を新たにしました。

この様に、善人がバカを見る世の中ですから、皆様も他人の厄介事に首を突っ込む時は、十分の覚悟を持って挑む事をお伝えして終わりたいと

思います。

今年も残り少なくなりましたが、皆様方が健康で良い年を迎えられます様、お祈りしてご挨拶とさせていただきます。

また新たな年にお会いいたしましょう。



(みつえ)

茨城県の難読地名とその由来 (29)

木村 進

常陸国風土記と地名 (5)

(九) 久慈 (くじ)

久慈 (くじ) 郡の名前の由来は「郡家の南近くに小さな丘があり、そのかたちが鯨に似ていたことから倭武の天皇 (ヤマトタケル) が久慈と名付けた」と書かれています。

(1) 谷合山…切り立ったこの山の絶壁は、一枚岩のようで、そこに大きな穴があいており、そこにサルが群がって生活している。…現在地は不明だが、岩がゴツゴツした山ということで奥久慈の

大子町南にある男体山あたりや、竜神吊り橋のある武生山 (たきゅうさん) あたりか。

(2) 河内の里… (ここは昔「古々 (ここ) の村」といったが、これは猿の鳴声 (ここ) からきたという。…旧水府村の東部と旧常陸太田市の北部にまたがった地域で河内村 (かわちむら) があつた

(3) 静織の里…ここで初めて倭文を織る機が使われたことから名付けられた。…現 静神社

(4) 玉川…この小川は青色の瑪瑙 (メノウ) がとれ、良い火打石になるために玉川と名付けられた。…現在も玉川という。水郡線の常陸大宮から玉川村駅にかけてのあたり。

(5) 山田の里…新しい田が多いことから名がついた。里の清き河 (現山田川) は、北の山から流れ出て久慈河にそそいでいる。大きな鮎 (あゆ) がとれる。清き泉がここにそそいでいて、夏にはあちこちの村里から暑さをのがれて、手をとりあつて集まってきた。…現常陸太田市和田町、松平町あたり、旧山田村

(6) 大伴の村…この村の河の崖には鳥が群がり黄色の土をついばんで食べる。

…現 常陸太田市

(7) 太田の郷…この郷には長幡部の社がある。この織物は、裁つことも縫うこともなくそのまま着ることができ「全服 (うつはた)」という。別の言い伝えでは、太絹を織るのに人目を隠れ家の

戸を閉めて暗いところで織ったことから「烏織」というとも。力自慢の軍人の剣でもこれを裁き切ることはできない。…現 長幡部神社

(8) 薩都 (さつ) の里…昔、土蜘蛛いう名の国栖がいて、兎上の命の軍に滅ぼされたときに「幸なるかも」と言ったことから、佐都と名付けられた。…現在の薩都神社 (さとじんじや…常陸太田市里野宮町) あたりが中心で、この薩都 (さつ、さと) の名前は「里川」「常陸太田市里美」「里野宮」などの地名として残っている。

・薩都河 (さとがわ)…源は北の山に起こり、南に流れて久慈河に合流する。…現在の里川

(9) 賀毗禮 (かびれ) の高峯…この里の東に大きな山があり賀毗禮の高峯という。

昔、立速男の命が天より降り来てこの地に留まつた。この場所に向かつて人が大小便でもしようものなら、たちまちこの神の崇りにふれて病にかかった。このためこの里には病人が増え続けてしまい、困って朝廷に報告して、片岡の大連を遣はしてもらった。そしてこの地に神を祭り、「今この土地は、百姓が近くに住んでいるので、朝夕に穢れ多き所です。よろしく遷りまして、高山の清き境に鎮まりませ」と申し上げたところ、神はこれをお聞きになって、賀毗禮の峯にお登りになった。…現在日立市の御岩神社奥宮のある御岩山が賀毗禮の高峯だと考えられている。

(10) 密筑 (みつき) の里…この村に大井という泉 (現水木町の泉) があり、その水は、夏冷た

く冬温かい。…現日立市水木町付近

(11) 高市(たけち) … 高市から東北へ二里のところに密筑(みつぎ)の里がある

高市(たけち) … 現大甕駅の西南側の日立市石名坂町から南高野町付近

密筑(みつぎ)の里 … 現日立市水木町に「泉が森」という県指定史跡の池がある

(12) 助川(すけがわ) … ここは、むかし倭建の天皇(ヤマトタケル)がここで皇后様(弟橘姫)と行き逢うことができたので遇鹿(あひか)とい

っていた。このあたりで鮭が採れた。俗に鮭の祖を「すけ」というので「助川」というようになった。ここには助川の駅がある。

… 現在の日立市助川付近

(十) 多珂(たか)

多珂(たか) 国の由来… 建御狭日命(多珂の国造…出雲族)が国を巡り山が険しく高いので「多珂(たか)国」と名づけた。

(郡の境界は南を久慈郡の助川(現日立市助川)、北を陸奥国石城郡苦麻之村(現福島県大熊町)までとした。

しかし、この範囲は広すぎるために7世紀前半の孝徳天皇の御世に、多珂(たか)と石城(いわき)の二つの郡に分割され、石城郡は陸奥国になった。)飽田の村…

倭建の天皇(ヤマトタケル)が東国を巡ったときこの野で宿をとった。

野には鹿が群れ、海には八尺の鰻(あわび)がいて、鯉もいる。天皇は野に出て、妻の橘皇后は海に出て、野と海で獲物の幸を競うことになった。

野の狩りは何も獲れなかったが、海では大漁だったため、天皇は「野のものは得ずとも、海のは飽きるほどだ」といったのでこの地を後に「飽田村」と名づけられた。

… 現日立市相田町あたり

仏浜…

海辺の岩壁に観世音菩薩の像を作ったため、ここを「仏浜」という。

… 現日立市田尻町度志前の「佛ヶ浜」 この佛ヶ浜の名前は風土記の内容とここに度志観音があるために、後で名付けられたもので、小木津浜の磨崖仏などの地もこの候補に挙がっている。

藻嶋(めじま) …

倭建の天皇(ヤマトタケル)が船で島の磯廻をした時に、「種々の海藻が多いところだ」といったので「藻嶋」の名が付いた。

… 現日立市十王町伊師付近

ここには「藻嶋の駅」があり、東南の浜に常陸国では最も美しい玉のような碁石がある。

・藻嶋の駅 … 現日立市十王町伊師の愛宕神社あたり

・碁石の取れる浜 … 現日立市小貝浜(川尻海岸)
(注) 風土記に登場する地名の現在地は明らかになっていないところも多く、推定地です。

(常陸国の難読地名 完)



(よしこ)

【風の談話室】 《読者投稿》

やささと暮らし(70)

さと女

久しぶりの快晴です。二日間(土曜・日曜)フラワーパークにて八郷マルシェが開催されています、籠編み師匠の店番を頼まれました。主催者から開催の挨拶があり出店者集合…初めての体験にドキドキです。

・晩秋の八郷…彼方此方の集落がオレンジ色に染まっています。わが家の渋柿は例年になく熟すのが早い、熟す前に吊るし柿を…早い時期に干した物は、長雨続きで残念ながら失敗。その後は気温も下がり晴れが続いたので…助かりました。柿が熟しては干し柿にはなりません、その熟し柿を使って柿酢づくりに励んでいます。2ヶ月前に仕込んだ熟し柿はいい具合…美味しい柿酢になっています。酢の物に、お寿司にと徐々にまろやかな美味しさに変化して行くでしょう。

・さまざまな終活…先日古い知人(と?言っても一度会っただけの方)から突然のメール。貴

女に貰って欲しい・・・と？よくよく聞いて見ると、自分の庭に好きで集めたたくさんの植木(種々の薔薇)がある、鉢植えの物もあるので、貰って頂けないか・・・？自分たちはもう年なので、息切れがして手入れが出来なくなったとのこと。こちらも終活の年なのだが後数年は大丈夫かな？と・・・思い、先日茨城の北の方(東海村)まで出かけた。そして大切に育ててきた薔薇、20数本を頂いてきた。早速翌日から大仕事のはじまる。ちゃんと育てられるか不安だなあ???

・3年ぶりに開催された園部地区での文化祭。園部公民館で行われたのは初めて・・・。我がエコクラフト会にも出店依頼あり、展示準備のお手伝い。お隣にある園部保育所の子供たちもかわいい絵を描いてくれました。エコクラフト会から絵を描いてくれたお友達(園児)に小さな籠をプレゼント。籠の中には、顔が描かれたボールを入れた、小さなお友達、喜んでくれるかな？

・郵便局が主催する「石岡まるごと産直マルシェ」に行ってきた・・・久しぶりの東京にワクワク！スタッフの皆さん石岡の宣伝に頑張っていた。八郷ハングライダークラブでのVR(バーチャル)体験コーナーでは親子連れの方が楽しんでた。東京中央郵便局跡地(KITEビル)の中には、不思議な事に東京大学の博物館(郵便局とのコラボ)がありそちらも見学して来た。折角東京まで来たので、川崎まで足を伸ばし病院時代の旧友にも会って来た。お土産にはもちろん、マルシェで売られていたお酒や、やさとの納豆を・・・。それにしても、川崎駅周辺のあまりの変わりよう

に吃驚。旧友と別れ帰路につくと其処からが大変・・・人身事故があつたとかで電車内で1時間、土浦駅で降ろされてホームで2時間近く待たされ・・・やつと我が家にたどり着いたのは夜の8時近く。それでも楽しい1日だった。

・街に活気づくのは、本当に元気をもらえる。今日は有明のクラフトフェア、夜はフラワーパークのイルミネーション点灯式。フラワーパークはまだバラも見頃。大輪のマリーゴールドも満開でした。5時イルミネーションが点灯すると観覧者から歓声が、幻想的でほんわり暖かく、一瞬胸がジーンとした。

・いつもの年はぎつしり実る柚子・・・緑色の時は数えるほどしか確認できない？やつと黄色くなつた柚子の実は15個だけ・・・。ちよつと残念だが、柚子味噌でも作ります。

・ザル菊・・・本当は別名が有るのでしょうか？ザルを被せたような形なのでこう読んでいる。春にポットに挿し芽した苗を80本ほど頂き、知人達にも分けて、鉢植えや地植えにした。9月末から咲き始め、現在も大部分は咲いている。今年は鉢植えの物を、2件のお店(カフェオーブ・まんまや)の軒先に置いてお客さんに楽しんでもらう。来年はもっと、立派で大きなザル菊を咲かせようと、今からワクワク・・・。毎日の観察と水やりが結構楽しかった。苗頂いたのが近所の方なので、枯らしてはならないと、頑張った。



(ちえこ)

下士官の手記 燕石(えんせき)

大陸での日々 15 逆襲(その1)

×月×日

掘立小屋の隣には立派な日本家屋が建っている。部下から聞いたところでは、大阪に金持ちの主人がいて、女の一人に此処を任せているらしいということだ。時折海を渡ってやってきては金を持つて帰っていくのだという。軍の許可は取つてあるという。

どうせ金を渡して話を付けたのだろう。戦闘が激化して、暫く来ていないという。

「これらの女たちの多くは、二度と祖国の土を踏むことはなかった。また、慰安婦として満州や朝鮮や台湾の貧しい村々から女たちが、言葉巧みに騙されて連れてこられていた。中には無理やり連れてこられたものも少なくはない。この者たちはもっぱら下っ端の兵隊用であった。どこの軍隊でもこうしたことは行われていたが、日本軍は殊にひどかった。「衛生管理」と称して軍医が性病検査にあつた。これら慰安所はすべて、主計、経理の管轄下にあつた。当然、軍の管理下にある。植民地の住民などは、二等国民として扱った。親たちがこんな風だから、子供の間にも劣等国民と考えるものが多くいた。

やがて敗戦となり、これら植民地にいたものは、

命からがら逃避行する羽目となった。頼みの軍隊は、高級将校を先頭に、一般人を置き去りにさつさと逃げてしまった。ましてや慰安婦を助けようなどというものは一人もいなかった。

×月×日

来る日も来る日も慌ただしい任務に追われる日々だった。此処の通信隊は、人員が200人をはるかに超えてしまった。分隊を5個作った。さらに、陸軍から、通信の新兵の教育兵を20人ばかり押し付けられた。

内地から明日には、少年通信兵が30人配属になる。内地の本隊に無線で抗議した。どうせくれるなら、ベテランをと。

「実戦で鍛えるのが一番だ。ベテランは近々規模作戦があるのでそちらに回すしかない。出来るだけ援助するからそっちで面倒見てくれ。」と言ってプツリと切れた。

隣の陸軍師団も、更に奥地の侵攻作戦の為、大半が出動して、1個中隊ぐらいの兵力の留守部隊だけである。

相談に行っても却ってこちらの戦力を頼みにされる始末。

実際、兵員は、歩兵1個中隊を上回る。銃器も、重機関銃、擲弾筒。迫撃砲。無線機輸送用の、トラック数台。軍馬が20頭。歩兵大隊半分程の実力がある。この辺りは元々、匪賊が支配していたが、大頭目は一応親日という事になっている。が、幾つも有る中小の匪賊は、金で幾らでも寝返る。現にこちらか何度も襲われ、小さな分掌の幾つかは、全滅している。そんな中、1個中隊半の兵力は、この辺りでは一番だ。

×月×日

始めに来た少年兵は、今や立派な小隊となって、俺が指揮し無くとも、小規模の匪賊など蹴散らしてしまう。今やここ、D鎮がこゝろで一番安全なところとなっている。日本の居留民も続々と集まってくる。中隊扱いという事で、立派な兵舎を独占している。

いつまでも金や物資が続くわけがない。黄さんとも相談して商売を始めることにした。

商売などやったこともないから、姑娘愛々を頼ることにした。

このあたりでできる麦を買い付け、戦渦に巻き込まれていない大都市へ送る。いつかの山の村では、炭を焼かせ此れも運ぶ。幾つかの大小の河川・湖で採れる川魚も、干物にして運ぶ。代わりに、工業製品を仕入れてくる。余った儲けは隠しておく。

×月×日

ここらで、付近の匪賊を、徹底的に叩いておかなければ、いつ寝首をかれるかわからない。

制裁を加えるのは、残酷なようだが、頭目たち少数の者は、村の者たちから、とれるだけのものを搾り取っている。体も奪い、娘も奪い、好き放題だ。こいつらが制裁を受けるのはいわば自業自得だ。部下の者たちにもこの点を訓辞して、同意を取り付けてある。

黄軍属が、おりにふれて古い昔からのこの国の、歴史を教えてくれた。

負けたC屯の者らも大勢連れてこられた。敗れた者たちは、否応なく奴隷の扱いをされる。女た

ちは、奴婢以下の性奴隷だ。

B頭目と相談して、C屯の者たちと参をはじめ幾人かのものを貰うことにした。

意外に少ない分け前の申し出に、意外だ、という顔をしている。

A屯の老いた長老など何の使い道もない。C屯のC頭目も老いている。財物も、少しだけしか貰わなかった。

「大人は欲がないな。」という。

「貸しにしといて、もしも、日本軍が負けたら、そのときは助けてくれよ。」

「あつははは。大人は、面白い。冗談がうまい。」すっかり上機嫌である。

A屯に来る途中に、廃村があった。C頭目以下を其処に住まわせた。とりあえず、井戸もあるし近くには川も流れている。荒れた畑も何とかなるだろう。みんな感謝している。それはそうだろう、あのままなら、ほとんど命がない。

あるいは着のみのままに荒地に放り出される。少しの武器も置いていくことにした。部下のほとんどを本隊に帰す。この場所は、A鎮と言ったが、戦乱で無人となっていた。三つの屯とほぼ等距離にある。いざというときはここを拠点にするつもりである。

日本軍などは、これっぽかりも頼りにしない。

×月×日

周りを調べたりして何日かたってしまった。C頭目についてきた者達が、せつせと綺麗にしたので、見違えるようになった。本隊から、こっそり物資を運ばせる。一人であれこれやったのですっかり疲れてしまった。C頭目は、すっかり気落ちして、

只の老いぼれになってしまった。ここは、あの長老に任せる事にした。C頭目の後室の者たちは、初めのうちはA屯の者に聞いたのだろう、すっかり怯えていたが、何もしないと分かると少し安心したようだ。一人幼い女の子がいたので、暇があると遊んでやった。幼いので怖くないのだろう。折り紙を教えてやると、喜んで、毎日来ては纏わりつくのだった。母親たちは心配である。俺もこれだけ恐れられているのかと思った。

×月×日

娘と遊んでいると、母親が入ってきた。

「心配するなよ。こんな子供に手など出すものか。B屯にも、A鎮にも沢山女がいる。親だから心配なのだな。」

「・・・」

「一緒にお茶でも飲もう。」

テーブルにお茶と菓子を用意させる。三人で菓子をつまんだり、茶を飲んだりする。ようやく警戒心も薄れた様だ。日本でのお茶の飲み方はこうだと教える。日本の事をいろいろ聞きたがる。

長老が氣を利かして、酒と肴を運ばせる。

「付き合ってくれ。」

二、三杯飲む。いつの間にか夕暮れだ。娘は居眠りしている。夕食が運ばれてくる。この二日ばかり前に、姑娘が来てご馳走を置いていった。それを料理したのだろう。久しぶりの料理に、帰ろうかどうしようか躊躇している。

「娘と一緒に泊まって行けよ。」

意味するところは一つだ。C頭目はもうなんの力もない。A屯の長老も、老人だし然も、女には興味がない。参はまだ少年だ。ここへ入ってきた

時から半ばそうなると思っていた。いや期待していた

娘のことは表向きの口実だった。C頭目には、正室をはじめ、家婢をいれば何十人もの女が仕えていた。

女はほんの一、二度、御手付きになって、その後はぱったり訪れが途絶えた。一つには正室が異常に嫉妬深かったこともある。

子供を一人生んだことで、たちまち用済みとされたのである。もしも氣に入られれば、この前来た姑娘のように、大事にされるだろう。自分にはとてもあの姑娘のような才覚はない。

あとは採る方法の一つだ。ざっとこんなことなんじゃないだろうか。

途中から、どんどん杯を重ねている。娘を長椅子に寝かせ、自分の上着をかける。

大陸での日々 15 逆襲(その2)

×月×日

私の率いる部下たちは、みんな激戦を潜り抜けて生き抜いてきた歴戦の強者だ。

このあたりでは最強の部隊と言えるだろう。強力な火力で敵に反撃し圧倒した。初めて使ったが、重迫撃砲二門の威力もすさまじいものだった。轟音とともに敵の人馬が宙に舞う。後にはぼつかりと巨大な穴が開いている。武器を放り出して逃げてゆく敵を、トラックで追撃し、かたっぱしから掃討する。しかも、「モーゼル將軍」の部隊と聞いて、あっさりと戦意喪失したという。戦線はどこへいっても膠着状態だった。

×月×日。

王鎮からの応援が着く。二百人ばかりが、トラックで来る。持っている武器もトラックも、姑娘たちが調達したものだ。この二百人を敵の真後ろに展開する。明朝総攻撃を指示する。

×月×日。

夜明けとともに、重火器の一斉射撃である。応援の者たちもほぼ同数の、火器を持ってきた。

敵はたちまち総崩れとなった。敵の半数以上が死傷した。指揮を執っていた頭目は、王頭目の仲間らしい。有無を言わず即刻射殺した。残りの者は武器を取り上げて、追放した。ここに蓄えられていた、おびただしい資産はすべて没収した。その半分はこの住民に配った。応援に来た者の半数をここに残して、中継拠点とする。

このあたり一番の軍閥だということだが、これだけ弱体化してしまったら、これ幸いと廻り中から寄ってたかって叩かれることになる。小頭目が二、三人、部下とともに加えてくれと泣きついてきた。それらの連中で、二個小隊を編成する。

×月×日。

漸く、××に着いた。よけいなことをしていたので、ひと月以上の遅れだ。さっそく申告する。遅れたことについては御咎めなしだ。我々に対しては、はれ物に触るような扱いだった。これまでの経緯から、バックには強力なえらいさんがついているし、率いているのは優秀な兵士達だ。彼らの苦境を救ったことも数え切れない。

×月×日。

此処の前線からさらに西の奥に派遣されることになった。もうそこは、西域と呼ばれる地方である。今までの戦いぶりから、通信隊にしておくのは惜しいということになった。歩兵3個小隊を預けられる。このあたりに展開する、3つの軍は、正面の敵で手いっぱいでも、更に奥地には手が回らないという。

「いくつか、特務班が展開しているので、それを頼りに行ってくれ。」

×月×日。

トラックに分乗し出発する。子飼いの部下たちも同行させる。

「同行を許さないのならお断りだ。てこでもうごかない。」と強硬に申し入れた。

やむをえんだろう、と許可になった。これまでの体験から、上級司令部などに信用していない。こちらが強気出ると、とたんに萎縮してしまう。私からすれば、上級司令部などは頭でっかちの連中の集まりだ。碌な作戦も立てられず、無駄に兵隊を死なせている。自分たちは暇さえあれば、慰安所で芸者を上げてどんちゃん騒ぎしている。前線の苦勞などお構いなしだ。これが、「皇軍」の実態だった。

これまで幾人の部下を死なせてしまったのだろう。

×月×日

6個小隊を率いて出発した。途中で、手配しておいた装甲車二台と合流する。司令車として、鹵獲した敵のトラックを改良して使うことにした。全部を、師団の工作班に頼んで、分厚い鋼板で囲

った。

この中には無線機をセットした。屋根の上に二連装の回転式対空機関砲座をつける。

この頃は、頻繁に敵の空軍の空襲もある。同じく鹵獲した敵のジープ一台。サイドカー二台。それぞれ機関銃を装備する。兵員はすべて、トラックに分乗して移動する。トラックには、牽引車をつけて、対戦車砲を引かせる。ちよつとした機甲部隊だ。これで、国民党軍の正規部隊とも互角に戦える。

×月×日。

ここ数日まえから、砂漠地帯に入った。砂漠と言つても、砂の山があるわけではない。不毛の石ころだらけの大地がどこまでも広がっているだけだ。殆ど草木も生えていない。

×月×日

補給所につく。ここから先には、日本軍の大部隊はほとんどいないという。

×月×日

日中は激しく照り付ける暑さで、やられてしまうので、トラックの陰で休む。

強い日差しに日中は思考力も鈍る。移動はもっぱら夜間だ。

×月×日

准尉任官の通知が届く。とうとう、准士官となった。帰着したら、士官学校に入校せよという。

×月×日。

どこまで走つても、同じ光景が続く。つくづくこの国の広大さがわかる。こんな広い国を相手にして、いつまでも戦が続けられるはずもない。

×月×日。

今日は一日中、水を探した。ここでは水がなければ半日と持たない。

×月×日。

時々駱駝の隊列と出合う。いよいよ異国に來たなという気がする。

×月×日

姑娘からの無電で、B頭目を捕まえたという。俺が戻るまで生かしておくそうだ。久々に聞くうれしいニュースだ。

×月×日。

小さなオアシスの村に泊まる。言葉は全く通じない。目の色が、青く、髪の毛も赤茶けている。肌の色も白い。ありつたけのタンクや容器に水をいっぱい入れる。ここには、小部隊が駐屯していた。我々の装備を見て、
「うらやましいな。」
という。

「これだけ強力なら、安心なんだが。」

連日の敵の襲撃に、日々悩まされているという。我々がいた時も、襲ってきたが、対戦車砲も加えた反撃に、あつという間に逃げ去って行った。部隊長はしきりに感謝している。

「これで当分は襲ってこないだろう」

「なんなら、こつちから追撃したいぐらいだ。」

「隊長殿、手を貸してやりませんか？」

若い小隊長はやる気満々である。

「そうはいかん。任務があるんだ。」

二日ほどここに留まって、三方向に分かれて、敵情偵察をする。指揮官と情報交換する。この先には、さらに規模の小さな部隊がいるだけだという。日本軍の支配もこのあたりまでだという。帰りに聞いた話では、われわれを恐れてしばらくは攻撃がなかったという。

×月×日

ここらでは、欧州のラジオが聴こえる。欧州では、枢軸国・ドイツが相変わらず快進撃しているという。

ロシアとも戦が始まったという。イタリアはどうなんだろうか。

×月×日

これまでの経過を、司令部に報告する。例の参謀の消息は、つかめていない。

×月×日

もう少し先まで行って、何とか参謀を救出してくれ、と言ってきた。

「何処まで俺を使い捨てにする気なんだ。」考えるのはこんなことだ。怒りがこみあげてくる。

×月×日

持ってきた、移動式無線機ももう、電波が拾えなくなった。後は、参謀本部が明治のころに作った、不正確な古い地図が頼りだ。

×月×日

敵機の空襲を受ける。対空機関砲で応戦する。ありつたけの火器で応戦する。輸送隊と間違えて、襲ってきたらしい。思いがけず強力な反撃にあい、あわてて飛び去った。こちらには損害がない。兵隊たちから歓声が上がる。

「一機ぐらい撃ち落したかったな。」

「何発か命中したぜ。」

「今度きたら、俺が撃ち落してやる。」と、言っている。全く頼もしい連中だ。

×月×日

漸く通訳を見つけることができた。隠し持ってきた大量の、金銀がものを言った。

×月×日

「日本人など産まれて初めて見た。」という。こっちだって初めてだ。

×月×日

食べるものは、毎日羊の肉である。これもなれど意外にうまい。

なれない新兵などは、環境の激変に、すっかりやせ細ってしまう。

×月×日

ついにひとり倒れて、意識が戻らぬまま、あの世行きだ。無責任な司令部に腹が立つ。戦闘で死ぬより、こうして病死する方が多いのだ。

×月×日

転進の目的の一つは、行方不明の参謀の救出だ。

これは、極秘ということで、小隊長たちにしか知らせていない。

××攻略作戦の時に、敵に連れ去られたのだ。

×月×日

考えてみれば、隣国に土足で踏み込み、乱暴の限りを尽くしている。「五族協和」などと言っているが、実際は自分のところだけが一番と思っている。「五族協和」というのは、もともと孫文が言い出したことだ。

そんな借り物の国策で大陸に派遣され、同じように暴力の限りを尽くしているのだから、私も同罪だろう。

×月×日

特務機関のものだ、という支那服の男が男が尋ねてきた。階級は少佐だという。

「貴公のことは、このあたりの者の間でも有名だ。できれば一緒に手を組んでやらないか？」という。

「任務がありますから。」という。

「本当に惜しいな、これだけの兵力なら、このあたりはいっぺんに制圧できるんだが。」という。

この男も、我々を利用しようというのか。軍には十分貸しがある。ここらが潮時だろう。

「一応任務は果たせたので、引き返します。」という。

「うーん、惜しいな。まあ、気が変わったらいつでも来てくれ。」というのだった。

考えてみたら、馬賊も合わせたら、三個大隊以上の兵力を動かせる。

×月×日

幾度か小規模な戦闘ののち、帰着した。背B》
ん視した隊員の遺骨を、送る。

引継ぎをして、士官学校に向かう。

×月×日

士官学校で、士官としての教育を受ける。

通信隊にいた時に、抜擢されて工業専門学校に
派遣された。M少佐の指示だった。少佐はなぜだ
か私を高く買っていた。

そこでは、専門教育を受けた。語学の教授は、
ふるさとの老先生を知っていた。

「あの方は、母校の大先輩だ。本来なら帝国大学
の教授なのだが、思想問題で引つ掛かって教授に
なれず、故郷に帰ったのだ。まさかその教え子に
会えるとはな。」

以来この教官には、なにかと世話になった。数
学や科学・電気工学は難しくて半分もわからな
かったが、後日これ等の知識は前線で役に立った。

×月×日

教育半ばで、前線への復帰命令が出た。留守部
隊が、大規模な攻撃を受けて、損害を被ったとい
う。急遽、少尉任官の辞令とともに原隊に復帰し
た。

×月×日

航空隊の輸送機に乗って、もどった。飛行機だ
とひとつとびだ。師団のそばに陸軍航空隊の滑走
路ができていた。

×月×日

アメリカ・イギリスの連合軍と開戦し、かなり

の兵力をそつちに持って行かれたということだ。

×月×日

帰着の申告も早々に、部隊の損害状況を調べた。
思ったほど人員の損害は出ていない。引継ぎを済
ませると、中尉昇進の知らせが入った。正式の中
隊長となった。いずれ大尉となる。

機動歩兵三個小隊。機関銃一個小隊。対戦車砲
一個分隊。通信一個小隊。工兵一個小隊。輜重一
個小隊。ほかに教育隊も任された。これは、S・
A少尉に来てもらって任せた。

このあたりきつての精鋭大隊である。独立大隊
を任せるといふ指令が届いた。

私の帰着をどこでかぎつけたのか、襲撃はぴた
りとやんだ。

×月×日

一個中隊を率いて、周囲の討伐に向かう。頭目
たちに連絡し、連携行動をすることにした。

×月×日

頭目の一人から連絡があり、聯隊規模の大部隊
が移動中だという。待ち伏せ攻撃をすることにし
た。頭目たちの小部隊に先に攻撃を仕掛けさせた。

×月×日

わざと敗走させて、敵の部隊を分断する。残っ
ている本体に、砲弾を撃ち込む。同時に装甲車を
先頭に突撃する。頭目たちの部隊の大半も同時に
攻撃を仕掛ける。双方入り乱れての大乱戦となっ
た。残っていた半数ほどの敵も正規軍だから、装
備も優秀だった。しかし、私の部下たちの方が強

者だった。短機関銃を乱射しながら敵の本部に突
っ込んで行つた。

数時間の激しい戦闘ののち、勝利を掴んだ。御
取りを追っていった敵は、本体の崩壊を知り、姿
をくらましてしまった。鹵獲品が山のようにある。
半分は頭目たちにかけて、残りは捕虜とともに師
団に送った。

×月×日

折り返し、方面軍からの感状と勲章が届き、少
佐任官の辞令が届けられた。部下たちもそれぞれ
昇進した。

敵は数個連隊が連携して、師団を襲い壊滅させ
る計画だったようだ。先制攻撃を受けて、この作
戦が、初戦でとん挫してしまったらしい。

×月×日

鹵獲品の中にアメリカ製の通信機や、ジープ・
トラック・対戦車砲などがあつた。これらは残し
ておいて装備に加えた。見た事のない兵器もあつ
た。一人で扱える無反動砲だ。ロケットランチャ
ーという。一発で日本軍の戦車などひとたまりも
ない。部下に命じて、操作を習得させる。このあ
たりにも敵の戦車が出没するようになっていた。
機関銃ではとても歯が立たない。

×月×日

戦勝を祝して、宴会を開いた。頭目たちも招い
た。昇進を祝って乾杯が続く。師団からも酒保品
が山のように届く。姑娘たちも大勢加えた大宴会
となった。近隣の住民たちも招いた。このあたり
では一番安全だ、ということ、僅かの間に多く

の住民が集まってきていた。

頭目たちは、大勢の着飾った夫人たちもつれてきた。

まるで祭りのようにぎやかさだ。歌を歌うもの、踊りを披露するもの。盃を持って挨拶に来るものが引きを切らない。

「大人はまさにこのあたりの大頭目だ。いずれは本物の将軍になる。」

「今だって立派な将軍だ。」

「何しろ、負けを知らないのだからな。」

「負けたこともあるさ。」

「部下たちの助けのおかげさ。頭目たちにもすっかり世話になった。」

「しかし鮮やかな作戦ですね。昔だったら間違いくなく英雄ですよ。」と、S・A中尉が言う。

見物人たちにもめいめい土産を渡す。

「大人、謝々。」

口々に言って帰っていく。

×月×日

翌日からはまた、寧日ない戦場の日々だった。

×月×日

住民たちを使って、防空壕を掘った。大きい防空壕にはその中に通信機を入れる。これで、空襲にあっても大丈夫だ。住民には相応の報酬を与える。周囲には、高射砲陣地も作る。

×月×日

付近の広大な荒地を開墾して、住民を雇って蕎麦や野菜を作らせる。このあたりの住民は、本当に貧しい暮らしをしている。自分も貧農の出だが、ここの人々はより貧しい暮らしをしている。

軍閥に搾取され、食うや食わずの生活をしている。共産党の宣伝隊がひそかに浸透していて、これらの人々の中に支持者を増やしている。いつの間にか、大猿の仲だった蒋介石の国民党と手を組んだらしい。当面の敵である日本軍を追い出そうというわけだ。

共産党の軍隊は、国民党軍と違い、略奪をおこなわない。士気も高いので、手ごわい相手だ。捕虜に対する扱いも、丁寧だ。「ジュネーブ協定」に従っている。

これ等の事は、専門学校の教授に教えられたことだ。また、通訳の黄からも聞いた。

日本軍は、士官にすらこれ等の事を教えていない。「軍人勅諭」という古臭いものを覚えさせるだけだ。こんなものは、チャンバラ時代の遺物だ。日清戦争の頃なら通用しただろうが、今は二十世紀なのだ。人間が空を飛ぶ時代なのだ。

×月×日

付属の教育隊では、英語の教科書も自由に使わせている。「ジュネーブ協定」などの国際法も学ばせている。最新知識を身につけさせている。軍人精神などの観念論など、戦場では通用しない。

此処の修了者が優秀なのを聞きつけて、ほかの部隊からはしきりに派遣を要請してくる。

×月×日

師団長が交代となって、検閲に現れた。なんとあの、掛け軸の将軍だった。

「貴公もすっかり将校になったな。どうだ。農のところへ来ないか？」

「あの節はお世話になりました。」

「どうか、見ていってください。」

新式装備の部下を展開して、実弾射撃の模擬戦闘を披露した。

「いや、話には聞いていたが、正直驚いたな。お前のところと正面戦をしたら、わしのほうが負けてしまう。」

と舌を巻いている。

後ろの幕僚に向かって、

「貴様たちもこのことやって勝てる自信はあるか？」

「とても無理ですね。」

「おほめにあずかって恐縮です。」

「まずまず貴公が欲しくなった。一個連隊を預けるからやってみないか？」

「いや、折角ですが、部下をここに残してはいけません。」

「若いものを何人か送るから、ここで鍛えてくれ。」

「わかりました。」

(続く)



(よしこ)

【ちよつとひつと】

考える葦

木村 進

パスカルは「人間は考える葦である」といった。葦は風に逆らわずしなやかに反って強風をかわし、またしっかりと立ち上がる。こんな姿を人間

の姿に例えたものというが、本当のところはわからない。手でも折ることだってできるじゃないか。日本の国は「葦原中国（あしはらのなかつくに）」と日本神話では表現されている。

葦は川べりや湿地帯に生える。

葦原中国とは高天原と黄泉の国（死者の国）とを結ぶ中間に存在する国というので、それは現実の日本国のことだとされている。昔から日本には葦がたくさん生えていたのだろう。

常陸風土記でも利根川から霞ヶ浦沿いの信太郡あたりの地帯を同じ表現をしている。

パスカル表現では、葦は葦でも、人間は考える葦であるという。

考えないのは人間ではないということなのか。

また、上野に西洋美術館がある。これは松方コレクションを譲り受けて開設された美術館だが、ここの庭にロダンの彫刻がいくつか置かれている。よく知られた「考える人」がすぐに目に飛び込んでくる。

この考える人とは何を考えているのだろうか？

この考える人の像の近くには、同じくロダンの「地獄門」というブロンズの門が置かれている。

ここに苦悩する人々などの真ん中の上部にこの考える人と同じ小さな像が描かれている。

この門には「ここを通る者は一切の望みを捨てよ」とあるそうだが、ロダンは考える人だけを別にまた作って「詩人」と名づけた。

やはり人間は考える動物だ。考える込む人は詩人なのだ。

さて、考えても結論が出ないときはどうするのか？

そんなことは簡単だ。分からなければ分からない

くてもいい。考えることが大切なのだ。分からなければ知りたいと思い、調べたり、教えるを乞うたり、すればよい。

でもここで肝心なのは自分の考えでそれを理解し、決して鵜呑みにしないことだと思う。

それが考えることだと思っている。

他人の考えを聞いて、考えもせずに鵜呑みにしたんでは考えたってちっとも面白くない。

最近の教育も少し気になることが多い。

あまり成績の芳しくない子供たちはすぐに答えを求めてくる。塾などでも出来る子は教え方さえ教えれば自分から進められる。

でも出来ない子は全て教えてもらって勉強をやった気になる。まあ、まずは自分の頭で考えるという習慣を身につけてほしいものだ。

【特別企画】

打田昇三の太平記（28） 卷第十二・3

○高時並びに一門以下、東勝寺にて自害の事

縦横無尽の活躍をした長崎次郎高重は、本陣で果然として一同に「…何をしている。早々御自害されよ！高重が先に手本をお見せしよう…」

と言うなり鎧を脱ぎ棄て、主君の前に置かれていた盃を取り、弟の新右衛門に酌をさせて三度飲み干した後「…是を肴に！」と言うなり、見事に切腹し自分で内臓を掴み出し息絶えた。

是を見た者は逃げる訳にはいかないから嫌でも次々と腹を切ったのだが、最長老の長崎入道園喜は北条氏の将来が心配で躊躇していた。其れを見た孫の新右衛門が十五歳の若年ながら「…父祖の

名を顕すをもって子孫の孝行と存じますれば仏神もお許し下さるでしょう…」と言いながら祖父を刺し其の刀で自分も切腹して果てた。結局、北条一族から同門の名越・塩田・赤橋・常葉・佐介など四十六名の武将、北条の縁に連なる者など二百八十三名の武士が我れ先にと切腹し、屋形に火を掛け自分たちで火葬をした。当然だが猛火・黒煙が天を掠めたから、其れを見た下っ端の武士たちも「生きていてはいけない！」と錯覚して八百七十余名の者が後を追ひ、更に鎌倉に居た六千余の人々が「是からどうなるか！」を案じて生きた心地がしなかったのである。元弘三年（一一三三）五月二十二日、平氏系九代の世が終わった。

○五大院右衛門宗繁、相模太郎を賺す事

太平記も書き進んで「卷第十一」に入る。「賺す」は「すかす」と読み、だますことを言うらしい。北条氏の主である相模太郎が味方に騙された：というこたらしいが、食うか食われるか「滅亡寸前」なので何が起きても不思議では無い。

新田義貞軍が鎌倉幕府本拠地を攻略して其処に暫く留まったから、関東八か国の武士たちは続々と集まる。其れ迄は敵陣に在った者たちまで再就職を願って履歴書を書き替え、やって来るのだが世の中、甘く無いから選考試験は厳しい。少しでも怪しい者は僧侶に身を変えていても斬られた。女性たちは尼僧姿になっても無駄であった。

此処に五大院右衛門尉宗繁という北条の家臣が居り重く用いられていた上に、北条の嫡子・相模太郎邦時は宗繁の妹が生んだ子であるから主君の信頼も厚かった。其処で北条氏は危急存亡の時を迎え、邦時を宗繁に託したのである。其の時に、

「…如何なる手段を講じても此の者を匿(かくま)い通し、時節が到来したならば盛立てて(敵に對する)怨みを晴らすべし…」と命じたのだが是は無理な注文である。当然ながら残党狩りが厳しく各地に隠れていた北条軍が次々と捕えられたのが其の際に「敵発見」の褒美が良くて、残党を隠していた者には重罪が課せられたから、当然のように、宗繁は条件が良い「主君を騙して敵に降伏すること」を決めたのである。

そこで、隠れていた主君に「…此処に居られることは誰も知らない…と思っていました、どうも敵に知られてしまったようで、明朝には船田入道が攻めて来る…という情報が入りました。急ぎ場所を変えねばなりません。夜に紛れて伊豆の山中へお逃げ下さい。私もお伴したいのですが大勢で逃げては敵に気付かれる恐れがあるので、暫く此処に残ります…」と誠にやかに申し述べた。

まさか、忠実な家臣が自分を騙すとは思わなから言うことを真に受けた相模太郎は五月二十七日の夜半に鎌倉を脱出した。昨日までは「天下の主の嫡子」として何処へ行くにも大勢の家臣が付き従っていた身ながら、今は身分の低い者只一人だけが太刀を持って付いて来る。当然、馬にも乗れず破れ草鞋で徒歩、編み笠で顔を隠し泣く泣く行く当ても無い伊豆の山道を進む他は無い。

騙した宗繁のほうは、是を自分で討つのも気が引けたので源氏の武士に密告して御褒美を頂く…ことにして船田入道の許に行き情報を提供した。是を聞いた船田は「恩知らずな不忠者め」と思いつつも、仕事であるから手配をして待ち受けた。相模太郎は五月二十八日の早朝に、浮浪者に身を変えて脱出するため相模川を渡ろうと渡し舟を待

ち川岸に居た。其れを宗繁が教えたから船田の家臣が来て捕えたのだが、時の將軍であるから粗末には出来ず縄を掛けた状態で馬に乗せ鎌倉へ移送した。是を見た沿道の人々は気の毒に思い涙を浮かべていたが、どうすることも出来ない。未成年でも將軍の嫡男で今は朝敵とされたのであるから翌早朝に殺害されてしまった。是を知った人々は古事には、我が子を犠牲にして幼い主君を救った忠臣が居たと言うのに、年来の恩を忘れ欲に絡んで義を忘れた五大院宗繁の所業を憎んだと言う。やがて新田義貞が此の事を知り、処罰を命じたので宗繁は逃亡し乞食となつて飢死したらしい。

○諸將、早馬を船上山に進める事

其の頃、都では五月十二日に千種頭中将忠顕、足利治部大輔高氏、赤松入道圓心らが、それぞれに馬を飛ばして「六波羅の没落(幕府軍討伐の成果)」を船上山に居ただけの天皇に報告した。

当然ながら自分たちの功績を強調したであろう。単純な公家たちは大喜びで天皇の京都帰還を考えなければならぬ、藤原経守の子・勘解由(かげゆ)光守が「…六波羅は落ちても今なお近畿には幕府勢力が残存しており、東八か国の軍勢は日本国の勢に對し、鎌倉中の勢は東八か国の勢に對すると言われまます。かつて承久の乱(北条氏台頭の機となつた合戦)でも官軍が苦戦をした経緯があるので軽々しくは動けません…」と主張し反對した。

一同が其れに従えば良いのだが、世間知らずの後醍醐天皇が未練たらしく「…占いで決めよう」と言い出した。何もしなかった天皇に發言の資格など無いのだが、權威には逆らえない。当然ながら占い師も天皇の意思に沿って占うしか無いから

不本意ながら「京都市行き」を言うしか無い。此の上は何を疑うべきか：同月二十三日には天皇が船上山から降りて来た。

「コソ泥」の様に逃げていた時と違い今回は堂々の凱旋であるから何もしなかった天皇も威張っていられる。官軍と言う美名の元に集まった軍勢が前後を囲み、行列は三十里も続いた。大蛇と違い「長ければ良い」と言うものでも無い。

鹽治(えんや)判官高貞が千余騎で先行して前陣を務め、朝山太郎が五百余騎で後陣を務めた。金持大和守は錦の御旗を差して駕籠脇に沿い、名和長年が帶劍の役で右に侍した。途中、小雨が道を清め、風雨が塵を払い警護厳重に行列は進んで、天皇は隠岐に流されてから初めての旅に満足しながら都へ向かったのである。

《読者の皆様へ》

太平記原文は全40巻という膨大な量があります。しかし、この打田昇三の太平記は筆者のご高齢に伴い、今回を持って一旦終了となります。

これまで多くの方にご愛読いただきましたことを深く感謝申し上げます。



(ちえこ)